



**Data**

監督・製作: クリント・イーストウッド

出演: アンソニー・サドラー/アレク・スカラトス/スペンサー・ストーン /マーク・ムーガリアン/クリストファー・ノーマン/イザベル・リサカー・ムーガリアン/ジェナ・フィッシャー/ジュディ・グリア /レイ・コラサニ /P・J・バーン /トニー・ヘイル /トーマス・レノン

## 👁️👁️ みどころ

87歳、監督歴47年のクリント・イーストウッドが『アメリカン・スナイパー』(14年)、『ハドソン川の奇跡』(16年)に続いて「実話もの(リアルヒーローもの)」に挑戦!

そこでの新機軸は、主役となる3人の若者をはじめ、「15時17分、パリ行き」の列車に乗り合わせた人たちをそのまま出演させたことだが、その功罪は?

列車テロの顛末そのものは単純だから、監督はそれを物語としていかに構成するの? また、『Hero』を歌った安室奈美恵は9月に引退するが、勲章までもらった3人の若者たちは本当にヒーローなの?

そこらあたりを、じっくりと・・・。



## ■□■次々と「実話もの(リアルヒーローもの)」に挑戦! ■□■

BSジャパンは2016年10月から「特別企画～イーストウッド無双!」と題してクリント・イーストウッドの主演、監督作を1年半にわたって放映している。87歳になった彼は、監督歴もすでに47年になっている。私は、彼の主演映画では初期の『荒野の用心棒』(64年)をはじめとするマカロニ・ウエスタンが大好きだし、監督作としては『許されざる者』(92年)、『ミリオンダラー・ベイビー』(04年)、『シネマルーム8』212頁参照)、『チェンジリング』(08年)、『シネマルーム22』51頁参照)等が大好きだ。そんな彼は近時、『アメリカン・スナイパー』(14年)、『シネマルーム35』24頁参照)や、『ハドソン川の奇跡』(16年)、『シネマルーム39』218頁参照)などの「実話も

の(リアルヒーローもの)」に取り組んでいるが、本作もその一つだ。

私は知らなかったが、2015年8月21日には「タリス銃乱射事件」が発生したらしい。そこでは、第一発見者としてテロリストの犯人からAK-47を奪い取ろうとした1人の乗客が逆にピストルで撃たれたため、列車内は大混乱に。しかし、AK-47を持って列車内を進もうとしたテロリストを、たまたま列車内に座っていた3人のアメリカ人の若者と、民間人の男性がそれを取り抑えたため、この4人はフランスのオランド大統領からレジオン・ドヌール勲章を受けたらしい。クリント・イーストウッド監督は『アメリカン・スナイパー』『ハドソン川の奇跡』に続いて、そんな「実話もの(リアルヒーローもの)」に挑戦!

## ■□■87歳、監督歴47年でこの次元に!■□■

『アメリカン・スナイパー』の主人公である「伝説の狙撃手」は160人も射殺した「レジェンド」だが、そんな人物をリアルヒーローと称しているの?イラク戦争を題材とした映画では、爆発物処理班の男を主人公にしたキャスリン・ビッグロー監督の『ハート・ロッカー』(08年)(『シネマルーム24』15頁参照)がすごかったが、そこでは爆発物処理班の男はヒーローとしては描かれていなかったはずだ。それと同じように『アメリカン・スナイパー』でも、後半にアメリカに帰還し、PTSDの症状を起こしたレジェンドの姿を描いた問題提起性がすごかった。また、『ハドソン川の奇跡』は2009年1月15日にUSエアウェイズ1549便に起きた、あわや墜落という危機の中、ハドソン川への不時着という決断を下し、結果的に乗員乗客155名の全員生還を果たしたサリー機長の英断と勇気を題材とした映画だが、そこではサリー機長の決断の妥当性について、国家運輸安全委員会(NTSB)が徹底的な事後検証に乗り出すストーリーが興味深かった。日本なら、「あんたは偉い!あんたはヒーロー!」で終わりそうだが、民主主義の国アメリカでは結果オーライが許されないのはさすが!と感心したものだった。

本作で「列車テロ」という実話の映画化に挑戦したクリント・イーストウッド監督は、本作では、スペンサー・ストーン、アンソニー・サドラー、アレク・スカラトスという3人の若者を俳優ではなくホンモノの当事者として起用するという超異例の手法をとった。これはもちろん、どんどん高額になっていく有名俳優の出演料をケチり、製作費をケチるためではなく、物語のリアル性を追求するためだが、その賛否は?また、その成否は?87歳、監督歴47年にして「この次元」に挑戦したクリント・イーストウッド監督に注目!

## ■□■列車モノ、密室モノとしての面白さは?■□■

列車モノ、密室モノが面白いのは、中国のフォン・シャオガン監督の『イノセントワールド-天下無賊-』(04年)(『シネマルーム17』294頁参照)、や韓国のポン・ジュノ監督の『スノーピアサー』(13年)(『シネマルーム32』234頁参照)等で明らかだ。

また、近時リメイクされた『オリエン特急行殺人事件』（17年）でも、列車の密室性が強調されていた。しかし、15時17分にアムステルダムを出発してパリに向かった列車内でのテロ事件を描いた本作も「列車モノ」だが、残念ながら密室モノとしての面白さはイマイチ弱い。

だって、犯人のアイユーブ（レイ・コラサニ）は用意周到なテロ計画の下で列車に乗り込み、いざその実行を図ったわけだが、スペンサー、アンソニー、アレクの3人はたまたま計画していた友人同士のヨーロッパ旅行でこの15時17分パリ行の列車に乗り込み、たまたまテロ事件に遭遇しただけのこと。また、映画なら例えばドゴール大統領の暗殺を狙った『ジャッカルの日』（73年）のようにいかようにも面白い脚本を書くことができるが、史実にもとづくリアルヒーローものになると、史実を動かすことはできない。したがって本来、本作のハイライトとなるべきテロ犯と3人の若者たちとの「攻防戦」は、史実によれば意外に単純で、一瞬に起きたあつけない出来事。そして、その結果は最初からわかっているし、そこに至る道筋も史実のとおり描かなければならないとすると、あまり面白みがなくなってしまうのは仕方ない。

アンソニー・サドラー、スペンサー・ストーン、アレク・スカラトスの3人にとって、クリント・イーストウッド映画に出演できることは大いなる名誉。そして、あの時の恐怖心は残っていても、この3人は若者だからそれを克服することは十分可能だろう。しかし、応急処置よろしきを得て奇跡的に命拾いをした乗客マーク・ムーガリアンは民間人だから、本作に出演することによって、思い出さざるを得ないあの時の恐怖は大きかったはずだ。それを克服しての本人の出演は立派だし、94分にまとめたクリント・イーストウッド映画としての完成度は十分だが、列車モノ、密室モノとしての面白さはイマイチ・・・？

## ■□■ヒーローもいろいろ！本作で監督が求めたヒーローは？■□■

日本が冬季五輪史上最多、合計13個のメダルを獲得した平昌冬季五輪は終了したが、そのテーマは安室奈美恵が歌った『Hero』。その歌声は大晦日の紅白歌合戦でも彼女の「引退ソング」として歌われ、高い視聴率をあげた。これを見れば、世の中にはヒーローを目指す若者があふれることがわかる。ヒーローを描いた映画もたくさんある。「HERO」を直接タイトルにした張藝謀（チャン・イーモー）監督の『HERO』（02年）は、秦の始皇帝暗殺を目指した刺客「無名」（本当の名は荊軻）の物語（『シネマルーム5』134頁参照）。ハリウッド並みの娯楽映画として作られた同作に対して、同じ「荊軻」を主人公にしながらかくまでリアルな暗殺劇を目指したのが陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『始皇帝暗殺』（98年）（『シネマルーム5』127頁参照）だ。

他方、キムタクこと木村拓哉主演の映画『HERO』（07年）は、「中卒」の「スーツを着ない」「型破り」の検事が、出世と保身ばかりを気にしていた東京地検城西支部では異質で、そのキャラと魅力が光っていた（『シネマルーム16』151頁参照）。また、近時

のハリウッド映画は、アメコミの中のヒーローたちを登場させる映画が次々と。さらに、現在私がBS12で毎日録画したものを観ている中国ドラマ『趙雲伝』は、槍の達人で、関羽、張飛に次ぐ劉備玄徳の將軍であった趙雲子龍をヒーローとして描いたものだ。

他方、時々スポット的に現れる、名もなきヒーローもいる。その一例は、2001年1月26日にJR山手線新大久保駅で発生した、鉄道人身事故における韓国人留学生たち。これは、山手線新大久保駅で、プラットホームから線路に転落した泥酔状態の男性を救助しようとして、線路に飛び降りた日本人カメラマンと韓国人留学生が、折から進入してきた電車にはねられて3人とも死亡した事件。人命救助のために自らの命を投げ出したこの件は美談として日韓両国で大きく報道されたが、さて彼らはヒーローなの・・・？また、2011年3月11日の東日本大震災では、自分の命を犠牲にして他人を守ったいくつかの事例が美談として報道されたが、彼らもヒーローなの・・・？そんな視点で考えると、フランスの大統領からレジオン・ドヌール勲章を受けた4人の男たちも、たしかにヒーロー・・・？しかして、クリント・イーストウッド監督が本作で目指したヒーローとは・・・？

『アメリカン・スナイパー』でクリント・イーストウッド監督は160人を殺したレジェンドをヒーローとしては描いていなかったし、『ハート・ロッカー』でもキャスリン・ピグロウ監督は爆発物処理班の男をヒーローとしては描いていなかったはずだが、さて本作では？

## ■□■たぐさんのレビュー、コラムのお勉強をしっかりと！■□■

本作のパンフレットは820円だが、そこには読み応えのあるレビュー、コラムがたぐさんある。それが、①川口敦子氏「現実そのものから出発し、もっと完全なものへ」、②大場正明氏「偶然を必然に変えたヒーローたち」、③菅原出氏「ヨーロッパとテロリズム」、④青山真治氏「ものすごくシンプルで、おそろしく複雑な・・・」、⑤樋口泰人氏「わたしたちはもはやそれを『映画』とは呼ばない」だ。さらに、3人のアメリカ人の若者たち自身のインタビューやクリント・イーストウッド監督のインタビューもある。そこでは、本作が描くヒーロー像についてさまざまな角度からの突っ込み、検討がされているので、それに注目！大場氏のレビューはタイトル自体が「偶然を必然に変えたヒーローたち」だし、クリント・イーストウッド監督はそのインタビューで「どこにでもいる普通の若者で、正しい時に正しいことをした男たち。彼らこそ時代が求めるヒーローなんだ」と語っている。

他方、私が本作を観ていてアレレと思ったのは、テロリスト犯に突進したスペンサーがAK-47で撃たれたと思ったのに、なぜか弾が出ていなかったこと。逆に、私が本作のパンフレットにある菅原氏の「タリス銃撃テロとその背景」を読んで、なるほどと納得したのは、そこに「2000発に一つあるかないかの不良弾薬がたまたま装填されたため発射しなかったのだ。」と書かれていたこと。つまり、スペンサーたちがテロリストの制圧に成功したのは、2000分の1の確率でAK-47の銃弾が発射されなかったという偶然

によるものだったわけだ。それでもスペンサーの突進は英雄的な行為？仮にそこで一発で殺されていてもスペンサーはヒーローになれたの？そこらあたりの判断は難しいので、パンフレットにある上記のレビューやコラムを読み込んで、一人一人しっかり考えたい。

## ■□「史実」をテーマとして、物語をいかに構築？■□

2015年8月21日に起きた「タリス銃乱射事件」という「史実」をテーマにした本作のストーリーは単純そのもの。青山氏のコラムを引用すれば「ストーリーはものすごくシンプル」で、「落ちこぼれで戦争ごっこが趣味の中学生3人組が長じて軍関係に就職。休暇で欧州旅行中にテロに遭遇、力を合わせて解決、フランスから勲章を受章、故郷に錦を飾る——。」というものだ。しかし、クリント・イーストウッド監督はそんな史実をテーマにした本作の物語をいかに構築するの？

そう思っていると、本作には少年時代のスペンサー（ウィリアム・ジェニングス）、アレク（ブライス・ガイザー）、アンソニー（ポール＝マイケル・ウィリアムズ）が登場するが、彼らはみんな落ちこぼれ。ヘンリー先生（P・J・バーン）、マーレイ先生（トニー・ヘイル）らは、これら3人のガキ大将をもてあまし、「校長室送り」をくり返すが、それに反発したのが、隣人同士で幼い頃から親友だったスペンサーの母親ジョイス（ジュディ・グリア）とアレクの母親ハイディ（ジェナ・フィッシャー）だ。ところが、黒人差別のみならず、あらゆる分野で差別主義が充満しているアメリカ（？）では、教師から「父親のいないシングルマザーの子供は問題を起すことが多い。」と、あからさまに言われた2人の母親はおかんむり。しかし、少年時代にこんな問題を抱え、いじめられた少年ほど、大人になると立派な青年になるものらしい。

スペンサー、アレク、アンソニーの3人は少年時代あれほど落ちこぼれていたものの、三人三様にサバイバルゲームが大好きだった。そのため、スペンサーは高校卒業後、アルバイトを経てEMT（救急救命士）として空軍に入隊、アレクはカレッジ入学後に州兵に、アンソニーは軍人にはならなかったが、大学生として2人との交流を続け、夏休みを利用して2人とのヨーロッパ旅行に参加していた。そんな3人が、「15時17分、パリ行き」の列車に乗ったことによってテロ事件に遭遇したのは偶然だが、さてそこにみる彼らの行動は？

『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）や、『スリー・ビルボード』（17年）と同じように、2018年2月8日付及び、2月23日付朝日新聞は本作の全面広告を載せたが、そこでは「苦悩を共にした3人の幼なじみ。彼らは無差別テロになぜ立ち向かえたのか？」の文字が躍ると共に、少年時代のサバイバルゲームで敬礼をしている2人の少年の写真が載っている。そして、小説家の江國香織は「少年たちの友情の物語であり、シングルマザーたちの物語でもある。」とコメントしているが、さてあなたは、本作にみる3人の主人公たちの少年時代の物語をどう解釈？

2018（平成30）年3月15日記